
偏見

紅井 電

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偏見

【NZコード】

N2740D

【作者名】

紅井 電

【あらすじ】

高校2年生の冬、主人公と周りの人物の一日を綴ったほのぼのしたラブコメ

(前書き)

初めまして 紅井 電 (あかい ひょう) と読みます。
生まれて初めて投稿させて頂きます。
文才のなさは、日頃から歎み締めていますが、読んで頂けたら
幸いです。

偏見とは他人からの一方通行である。

高校生活も2年目を終えよつがとする頃、空が白く染まり街や人の吐息さえも白一色に統一する雪……。
だが、ソレさえも溶かすのではないかといつほど我がクラス2年A組は暑かつた。
ん？、熱かつた…？

「チョコが欲しいか——ツ！…？」

「「ウオオオオツ！…」」

まあ、

よつするにバレンタイン、2月14日である。
俺の名前は、かぐらさか神楽坂春斗冬には似合わない名である。

黒髪を逆立てウルフヘアーツボくしていく顔は普通だと思つている。

もうわかつてゐるだらうが、とある高校の2年生だ。

しかし、女子も居るであろう教室でこんなことができるのかと思うだらうが、何故か男子だけが朝早く集まつて今日の作戦会議を行なつてゐる。

ハツキリ言おつ。メンドクサイ。

「なんで、俺まで……。」

「ウオイッ！そここのキニイ、ノリが悪いぞーチョコが欲しくないのかッ！？」

と、声を張り上げるこの集会を企画した生徒A君。性格は暑苦しい、ウザい。

「チョコット酷くないか？ソレでも友達か？…友達と思われていた

571

גַּעֲמָה וְסִינְתְּרוֹנוֹן

う。ウム、わがこじつ過ぎたらしく。わのひがくへ向へて立つてゐる

コイツの名前は伊藤将隆いとうまさたか中学からの腐れ縁である。

性格は……以下同文。……どうやら俺の友達らしい？

「オレは名前や性格よりもお前と友達ということを肯定してほしか

つ
た
。

涙ぐみながらというか泣きながら訴えてくる伊藤。

「話しが進まないから暫定してやるが、なぜ」「んなことをしている

卷之三

ヨコが貰えない野郎共が集まり、貰えたら称え、貰えなくても慰め合ひ血の涙を流し合おうといつ、皆でやれば怖くないといふ素晴らしい会なのだ！！」

「臺灣！」

「ねえ、今日チヨコ渡す人いる？」

どうやら女子が登校してきたようだ。

女子が来たそ変な目で見られてしょ!!

卷之三

「散つ！」

。シニシ一辯にて教説の説明を終る。

た。

ちなみにこの高校、1年は一階にあり2年は二階と3年は三階
が違う。しかも窓から消えたとなれば、…………、まあ、そういうこ

とある。

ギヤー——ツ！？足があらぬ方向にいい！　血がアア！？

まさに赤のバレンタイン。

「バカか」

「人がゴミのようだ」

「伊藤、生ゴミにはまだ、なつていないだろ？お前も続け
「これでライバルが減つたな」

「聞いてねえし、しかもなんて野郎だ。」

伊藤、恐ろしい子！……。キーンコーンカーンコーン
在り来たりな音で惨劇を流したチャイム。 ガラッ

「HR始めるぞー。」

我が担任、上月薫^{じょうづきかおり}が入ってきた。パツチリと二重で黒髪をポ
ニーテールにし、ビシッとスーツを身に纏いボディーラインを際立
たせる、一見おかたい感じがする美人だがさつきの口調からはサバ
サバした性格が見て取れる。

皆が各自席に着いていくなか、伊藤はライバルが減つたのが嬉しいのか笑顔で席に着いた。

「なにやら集団自殺が流行つていてるようだが真似しないように、まだこの学校で死人は出でていないがメンドクサイのでヤメロ。」

どうやらさつきの奴等は死んでいないらしい。良かつた良かつた。

「なんで先生何時ものジャージじゃなくてスーツなんですか？」

こういう事に敏感なのは流石女の子である。：ん？お前が鈍いだけだつて？知りません。「それは、お前らが一番知つているだろ

う？何故なら今日はあ？」

「バレンタインッ！」

男子に負けず劣らずノリがいい女子である。

「まさか先生はオレのタメにいッ？」

ワナワナ震えて叫んだ伊藤の額に出席簿の角が刺さつた。

「ほれ、甘^{あま}い愛のムチだ。」

「ぐおおお、受止められない。」

未だに勘違いしている伊藤は血を流しながら倒れた。

「バーカ、アンタなんかに先生が釣合^つ訳ないじゃない！…」そ
よそよと、口々に言う女子達、強いなあ。

まあ男勝りな性格の彼女は女受けがいいようだ。

「哀れだな伊藤、この状況でまだチョコが欲しいか？」

「今は血を止めるものが欲しい……。」

「なら保健室に連れてってやる」

伊藤を保健室に投げ入れ、何事もなく時間が流れていき昼休みには伊藤が復活し、今はメシを食べている。

「それにしても、春斗は恋愛事に余り興味を持たないよなー？」

「そうか？」 そう言って俺は首を傾げる。

「そうだつて、この前だつてカワイイ女の子がいても見向きもしなかつたじゃん」

「お前の言つカワイイと俺のカワイイは違うんだよ」

「じゃあ、どんな娘が好みなわけ？」

「そりやあ…………って、何でいるんだよ」

「『何でいるんだよ』なんて『』挨拶ね？春斗」

「おお、桜ちゃん！」

後ろから急に話しかけて来たコイツは 上月 桜じゅつきコイツも中学

からの腐れ縁だ。誰に言われるまでも無く我が担任、上月薰の妹である。

綺麗な茶色い髪を腰まで伸ばして居る、姉とは違いあどけなさが残つており、美人と言つよりカワイイ部類に入るのだらう。

「あら、伊藤君こんにちは」

「何の用だよ？桜」

「どうせチョコの一つも貰えない、淋しい男がどんな会話をしているのか聞いてやるつと思つてね」

「余計なおせ

「桜ちゃんオレに愛のチョコをおお……！」

「つるせえッ！……」「グフウウウ！……？」

この野郎耳元で叫びやがつて、思わず殴つつけたじやねえか。

「とじろで何の話だつけ？」

「気を取り直して聞いてみた。」

「アンタが誰にもチョコを貰えないって話よ
「余計なお世話だ。そういうお前は誰かにあげる予定でもあるのか
よ？」

「えっと、あの、……その」

顔を俯かせながら桜はいい濶んだ。

「なんだ？本当に居ないのか？」

「ちがッ！キーンコーンカーンコーン

「おつと、昼休みが終わっちゃった。オイ！伊藤そろそろ起きろー、
授業始まるぞ」

「ちょっ

「お、光子ちゃん昼」」飯はまだかいのぉ？」

「うるせえ、早く座れハゲ

「し、しじいっ」

「ハイハイ、桜も早く座れ先生来ちまうぞ？」

「あ、うん……」

「？、なんかあつたのか？アイツ。

「なんかおかしくないか？桜ちゃん」

「ああ、そうだな」

ガラッ

「お～い、薰先生の楽しい授業始まるぞ～」

「また、やつちやつた。

……彼との出会いは、四年前の今日と同じバレンタインの日
近所に新しく引っ越してきた人がいると母から聞いた、その人
が彼である。詳しく聞くと

彼は一人暮らしで両親は一人とも仕事で海外に行っており、仕送
りで暮らしているようだ。

私の家に近かつたタメ世話好きな母が家に招いて晩ご飯を食べた。

その時、彼を見て変な感じになつた。今まで異性に対してもこん

な事になつた事がないため、イライラとし、今のようになつた。

「どうしてうまく話せないんだろう。

今なら自分の気持ちがよくわかる。アレは一田惚れだったのだ
わづ。

今田こそ私の気持ち伝えよつと思つて初めて彼にあげるチョコ
昨日から作つてきたんだし、……それに春斗がそういうことに興味
が無いわけじゃない見たいだからチャンスよね！……早く放課後にな
らないかなあ。

お~い、やくひ~

ん？春斗の声が……

「オイッ！もう授業終わつたぞ？」

「ヒヤつ……？」

「つおッ！……何だよいきなり」

なんだ、コイッ？一ヤ一ヤしたり驚いたり

「は、春斗？びうしたの？」

一びっくりしたあ、いきなり私の顔覗いてくるんだもん！

「『どうしたの？』

じゃねえよ。もう放課後だぞ？」

「…………え？放課後？」

「そうだ、と俺はうなづく。

「なんで、帰らなかつたの？」

「私ったら、こんな事言いたいわけじゃないのに……。

「ああ、伊藤がチョコが貰えなくて泣いてたのを慰めながら帰るつ
かと思つたらお前が居たから、一緒に帰るだろ？」

「男じゃなく、桜ちやんに慰めて欲しい~」

「テンメヒ、人が気遣つてやうつと気を回したのによ、何様だコラフ?」「ヒイツ!...?スンマセンヒー.」

「なんだ、私を待つてたわけじゃ無いんだ
でも、一緒に下校するならチャンスよね?」

「なら、早く帰りましょう」

「そうだな」

――下校中――

今俺たちは帰路についている。

それにしてもなんで「ハイツ」こんなそわそわしてんだ? 教室から
ずっとだぞ。

そう思いながらギャーギャー騒ぐ伊藤を殴りながら、桜を見る。
ブツブツと独り言を言っているが聞こえない。

「オイ、桜? お前どうしたん!」

「そうだつ!...、人を慰めてるオマヒもチヨン貰え無いかっただじyan
!!?」

「え? チヨン貰つて無い?」

「ホントに!...? 春斗はチヨン貰つて無いの?」

「オメヒ等、耳元でうるせえよー」(怒)

「スミマセンせんせー」(汗)

怒り過ぎたかな? 伊藤はともかく桜にまで

「でも、ホントに? ホントにチヨン貰つて無いの?」 「ん? ああ貰
つて無い、一個も無いなんてどうでもこいと思つても結構哀し
いもんだな? 伊藤」

「オレは理由が分かる。と言つかみんな知つているんじゃないかな？」

春斗と桜ちゃん以外

？、俺と桜は一人とも首を傾げる。

ソレでも尚、伊藤は話を続ける。

「桜ちゃん、そろそろ春斗に言いたい事あるんじゃない？」

伊藤君の話を聞けば分かるが春斗と桜のソレは学校中の名物であり、公認となつていて。もちろん当の本人達は知らない。

「えつ！？何でソレを？」

「邪魔者は先に行つてるわ」

？、なんなんだ？

一伊藤のヤツ大きなお世話よ。

でも、一人つきりだしチャンスよね？

一方、伊藤はやはり帰らずに道端のゴミ箱に入り様子を伺つていた。

「チヨコが貰え無かつた変わりに恥ずかしい絵で我慢してやる

……まんまゴミである。

「で？言いたい事つて何？」

「あのね、…………」チヨ…………の

「え？聞こえない、もう一回言つてもうつていいか？」

「…………だから……」

キキ————イイイ————

ゴンツ————『ギいやああああ————』

「つ！？なんだ？なんだ？」

「なに？」

凄い音だつたな車か?、しかも伊藤の声が聞こえたよつな?

二人が呆然としている中、車から人が降りて来た。

「なんで、こんな所にゴミ箱があるの? 邪魔なんだけど……」

降りて来たのは……。

「お姉ちゃん!?!?」

「薰さん!?!?」

「我が担任である。

「お姉ちゃん、何してるの?」

もう、タイミング悪過ぎ……。

「おお~桜、オマエと春斗を探してたんだよ」

「なんで?」

「それはだな…………、」

「私の春斗くんを狙つているからだ!!!!」

「…………は?」

「一え?『私の春斗くん?』どうこいつ事?」

「…………悪い桜、すぐ言おつと思つてたんだけど、実は薰さんから昨日、告白されて付き合つてるんだ」

そう、俺はバレンタインに興味が無いわけでは無く、告白の事で頭が一杯だつた。

でも、この高校生活で薰さんと桜たちの母親にしかもらつて無いなあ。何でだろ?

やはり分かつていないようだ。

「それにしても桜、『狙つて』るつて?」

「あ……」

桜は顔を俯かせ真っ赤にしている。

薰さんは、ニヤニヤしながらこっちを見ている。

「だからっ！－！私も春斗の事好きなの－！昨日から春斗にあげるチヨコも作ったのに……お姉ちゃんも知つてるくせにッ－！－」「え？」

俺は状況が分からず

薰さんは不敵に笑い言い返す。

「だからよ、知つているから、昨日告白したのよ。それに初めて好きになつた人を取られたく無いのは貴方も同じハズよ」

そうなのだ、私達姉妹は、今まで誰とも付き合つた事が無い。告白されても全て断つってきた。だけどまさか初めて好きになつた人が同じ人なんて。

「で？どうするのかしら？春斗くん」

こちちらを振り向き薰さんが俺に聞いてくる。

実際俺はかなり悩んでいる。一人とも同じくらい好きで、薰さんから告白され、付き合つた。

そうすれば桜をあきらめられると思つた。でも今のようになつてしまつたのは俺のせいだ。

割り切っても無いのに先に告白されたからという理由で選んでしまつた。一人を取れば今までのような関係には戻れないだろう。

そう思つと胸が苦しくて切なくなつた。

「どうなるのだろ？、やつぱりお姉ちゃんを選らぶんだろうな。胸が痛いってことなのかなあ……。

「桜には悪いけど私だつて一目惚れだし、先に告白してたのが

桜だつたら？

……もしかしたら春斗くんが桜の方が好きだつたら、桜の方に行
つちやうんだらうな
なんか苦しいなあ「」。

「シ リ ハ …… う あ …… シ」

「「え？」」

ヒツヒツ俺は我慢できずに溢れてしまつた。

「うふ、チョシビリヒツたのよ~」「春斗くんビリヒツたの~」
一人がオロオロしながら心配しているが、俺は答える「」
が出来ない。

「と、取りあえず私達の家に行きましょ~」

「そ、そうだね」

俺は一人に支えられながら薰さんの車で移動した。

「落ち着いた？春斗」

「大丈夫？春斗くん」

「はい、すいませんでした。」

「せつときはホントにビリヒツたの~」

「春斗くん……。」

「俺も、せつときは一人のこと考えてたんだ……。」

俺は自分の気持ちを一人に話した。

「春斗くんがそんなことまで考えてくれてたなんて、私は自分の事しか考えて無かつたのに」「わ、私も自分のことしか……」

そして沈黙が続いた。それはとても長くて時間なんかもうひとつに止まってしまったように。

この沈黙を破ったのは意外な人物だつた。

「も～、なんのあ～むきからあ重苦しいな気ねえ」

「「お母さん？！」」

間延びしたしゃべり方をするのは、上月姉妹の母　　上月　美み
樹　　き　　一人の母だけあって美人であり、一人の長い髪とは違い肩で赤み
がかつた髪を切り揃えている。

世話好きでいつもお世話になつていて

「「何時から居たの？」」

一人が問いただす、俺も気になる。

「貴方達が帰つてきてからあ、それにしても双子じゃないのによく
言葉がそろつわねえ」

美樹さんが話しお入りたままでの空氣が軽くなつた氣がする。

「そんなことはどうでもいいのー」「」は私達と春斗くんの問題何だから入つてこないで」

薰さんがそう言つと、そつよと桜が続く。

「でもお、春斗くんばかり悩ませるのもどうかと思つわよお

「うう、と二人とも止まってしまった。

「ふう、困った子達ねえ、あんた達はいつもやうだつたわあ。好きな食べ物も好きなオモチャも一緒に、なのに自己中でどちらも譲らなかつたしいだから同じオモチャが一つずつあるのよねえ」

ため息をはきながら美樹さんは呆れたように言つ。

「でも！春斗は一人しかいないし」

「それに、私は譲る気はないわ」

またいがみ合つ一人に美樹は

「もう、一人とも春斗くんが言つた事忘れたのかしらあ？」

「聞いたわよ、私達のこと同じくらい好きだつてことも」

「じゃあ、一人とも春斗くんに着いて行けばいいじゃない」

「え？」

「こんな自己中娘のことをこんなに思つて、あまつさえ泣いてしまう男の子なんて春斗くん位しかいないわよお」

かなり恥ずかしいことを言われた気がする。

「でも、そんなことつていいんですか？」

「れじや一人とも納得しないんじや

「いいよね？お姉ちゃん」

「そうね姉妹で妬みあうのも嫌だし、私達一人が好きになつた春斗

くんなら大丈夫よね」

あつちは話しが着いたようだ

「春斗くん」

「何ですか？美樹さん」

「貴方はどうなのぉ？」

俺の答えは決まっている。

「桜、薰さん、これからも俺と一緒に居てくれませんか？」

「うんっ」

「当たり前よ、それと学校以外では薰って呼んで？」

「ありがとう、二人とも」

二人と見つめ合つて居ると

「私が居る事忘れてない？」

三人は顔を真っ赤に染めていた。

「そ、そうだ！まだチヨ「渡して無かつたわね？桜も」

「そ、そうだね」

二人は顔が赤いまま立ち上がり俺の前に立つた。

「「はいっ、春斗」」俺は一人からチヨ「を受け取つた。

「ありがとう」

今年は生まれてから一番嬉しいバレンタインでは無いだろ？

「じゃあ、私からのバレンタインはあ桜と薰つてことでいいわねえ

俺は火が出るんじゃ無いかと思つほど赤くなつていたに違いない。

「よろしくね？春斗くん

「よろしく、春斗」

チュウ、と一人から頬にキスのプレゼントを貰つた。

「ああ、よろしくーー！」

伊藤は俺と桜の事は本人以外知つてていると言つたが
偏見とは事実を含めた沢山のクジのハズレクジを事実と思い込
むことで、一方的に当たりと言い張る事だと俺は思う。

END

伊藤は一日後にゴミ収集員に発見された。

(後書き)

読んで頂きありがとうございます。御座います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2740d/>

偏見

2011年1月16日00時56分発行